

第11回 個人領域の形成

近畿大学 建築学部
准教授 山口 健太郎



【経歴】

京都大学大学院を卒業後、株式会社メトス、国立保健医療科学院協力研究員を経て2008年より近畿大学理工学部建築学科講師。2011年4月より現職。

特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護などの研究を行うかたわら、高齢者施設の設計にも関わる。主な建物に「ケアタウンたちばな、設計監修、大牟田市」などがある。

高齢者施設における個室の役割には第10回で述べたプラバシーの確保に加えて、個人領域の形成という側面がある。個人領域とは「テリトリー（なわばり）」とほぼ同意義で使用される。動物には他の個体の侵入を阻止しようとする排他的なテリトリーがあり、人間も動物と同じようにテリトリーを持つ。人間は動物よりも社会性があるためにテリトリーは一次的ではなく重層的になり、社会心理学者であるアルトマンは人間のテリトリーを次の3つに分類した。

1 次的テリトリー：寝室・居間など

（場所への強いコントロールがみられ、占有者の心理的な重要性が高い）

2 次的テリトリー：住居まわり、行きつけのレストランなど

（他者と空間を共有する）

公的テリトリー：公園、ホテルのロビーなど（誰でもオープンな場所）

そして、このようなテリトリーの中で人はそこが自分の領域であることを他者に知らせる行動をとる。その一つがパーソナライゼーション（占有化、個性化）である。例えば、住戸の前に表札をたてる、家の外に植物を飾るなど行為や、居室にお気に入りの写真やポスターを飾るなどの行為を通して、人はそこが自分のテリトリーであることを他者に知らせる。つまり環境に対して働きかけ、自分にとって過ごしやすい場所を構築していくことで、領域を形成しているのである。このような領域について我々は日常的に気付くことは少ないが、常に我々は環境と相互に作用しあう密接な関係を保ちながら生活している。

引用：川口孝泰、ベッドまわりの環境学、医学書院、1998.6

.....

この築き上げてきた環境との関係性がいったん壊れ、再構成を余儀なくされるのが環境移行（転居）である。転居の際、人はこれまでの環境を喪失し、新たな環境との関係を構築していかなければならない。住み慣れた家、行き慣れた店舗、親しみあるまちから離れ、あらたな場所において新たな関係性を築いていく。この環境移行は人生の中で複数回おとずれる現象であるが、若く希望に満ちた人であれば直ぐに新しい環境にも適応できる。だが、適応能力の低下した高齢者であれば苦勞を要する。高齢期における環境移行は、高齢者に多大な心身面でのストレスを与えることから、出来る限り環境の変化を小さくすることが望ましい。

この時、使い慣れてきた家具や愛着のあるものの持ち込みは、生活の継続につながる。嫁入り道具のタンスや、旅行の土産、家族の写真は、生活習慣や生活の記憶をつなげる。多床室であっても、ものを持ち込むことはできるが、他者に見られてしまう、防犯上もちこみにくい、または、壁が少なくレイアウトができないなどの問題により、現実的にはものの持ち込みが進まない。一方、個室であれば他人に気兼ねせずものを持ち込むことができ、四周が壁に囲まれているため家具のレイアウトやものの飾りつけの自由度が高い。

さらに整備された環境の中であれば、入居後も自発的な行為を促しやすい。例えば、ペンと便箋を買い、孫に手紙を書く。このような何気ない行為の背景には、居室に机が置いてあり、書くことができる環境が整っていることが前提となる。食堂にはテーブルもセットされているので、居室でなくとも良いのではないかと思われるかもしれないが、職員の方が使っていない合間を見計らい、車いすのポケットに紙とペンを押しこみ食堂に向かうというのは、よっぽどの意思がない限り行われたい。何気ない日常の出来事を少し家族に伝えたい、そのような行為を誘発するためには、それを支える環境のセッティングが必要となる。

このように個室は家具やものを持ち込み、自分自身が環境をコントロールできる物理的環境としての役割を担う。特に認知症高齢者にとって従前住戸の生活の継続や、安心して生活できる場の確保は、行動障害の緩和につながる。